



80年代カルチャーの恩恵

今年に入り、私が個人的に大きな衝撃を受けたニュース。それは、何といてもイギリスのロックスター、デビッド・ボウイの訃報でありました。昨年夏にこのコラムで少し触れた通り、私は高校生の頃大ブームとなっていた「MTV」にどっぷりとハマった世代で、デビッド・ボウイはもちろんマドンナやマイケル・ジャクソンなど、世界のミュージシャンが創り出すミュージックビデオに連日釘付けになっていたものです。

当時のスターでは既に亡くなっている方も少なくなく、フレディー・マーキュリー（クイーン）をはじめマイケル・ジャクソン、ロバート・パーマー、マイケル・ハッチェンス（インエクセス）、ローラ・ブラニガン、ロニー・ジェームス・ディオ、そしてホイットニー・ヒューストンといった、そうそうたる顔ぶれが浮かびます。さらにここ数か月ほどの間にも、レミー・キルミスター（モーターヘッド）やグレン・フライ（イーグルス）の訃報も伝えられたばかり。

考えてみれば1980年代に20代～30代だったミュージシャンたちは、ほとんどが還暦以上になっているわけですから、元気な方たちですら不測の事態が起こっても不思議ではない年代となって来ているのだなあと、改めて思ってしまう。そして、当たり前ですが鬼籍に入られた方たちは、二度と新しい曲を作ったり歌ったりすることはできません。我々がスターの死後の時間を楽しむ方法は、生前のビデオや曲を聴くなど「過去の繰り返し」しかないのです。

思えば、80年代近辺は日本でも「バブル期」などと言われる時代であり、それを象徴するかのように派手であることが美德のような価値観が、あちらこちらにあった気がします。冒頭のデビッド・ボウイも初期の頃は「グラム・ロック」というジャンルに区分けされることが多かったように、男性なのにお化粧をしてき

らびやかな衣装を着込む…という、従来の常識を覆すパフォーマンスを見せ、ジャパンやカルチャー・クラブなど沢山のフォロワーを生み出しました。

私自身は何というか、男性の化粧にはどうもなじめず、どちらかというグラム・ロック系アーティストはそれぞれ「色物」として捉えていたせいも、デビッド・ボウイに注目し始めたのは80年代初期の「レッツ・ダンス」以降でした。その頃はすでに派手なメイクはしておらず、肩パッドの入ったジャケットに大きなタックのついたパンツという、当時を象徴する男性ファッションでスマートに決め、曲の良さもあって一気にワールドワイドなスターに駆け上っていった時代です。しかも、そうした出で立ちは今「リバイバル」として20代前後の層に新鮮なブームを起こす現象もありました。先ほど、スターの没後は「過去の繰り返ししかない」と書いたものの、実は曲自体にしるファッションにしる、新しい時代に合わせた形でちゃんと進化し生き残っているんですね。

それに関し、当時私は男性の化粧などに違和感を覚えていたものの、知らないうちに異文化的なものを受け止められるようになっていた気がします。現在はインターネットやスマートフォンの普及、さらにはインバウンド効果で外国人とのつながりがごく身近なものになりましたが、もしかしたら私が一番80'Sカルチャーから受けた恩恵は、「異文化を受け入れる」という、一種の寛容性だったのかも知れないな、と思うのです。



当時よく買っていた80年代洋楽レコードの一部。今もお宝です

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジリコ、07年）